東方体験日記

夢の島

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方体験日記

【Ｎコード】

Ｎ４１０８Ｚ

【作者名】

夢の島

【あらすじ】

夢の中の出来事が現実に起きた少年（海竜勝）はいきなり幻想郷入りとなる。そんな少年は幻想郷に過ごす事になる。幻想郷の事を知らない彼は果たしてどうなるのか。東方二次創作小説「東方体験日記」海竜勝の不思議の世界（幻想郷）での体験話しです。

第1話～いきなり幻想郷に～（前書き）

どうもはじめまして夢の島です。小説書き初めのただの初心者です。今回自分が書こうとしてるお話しは幻想郷を舞台にした二次創作小説です。なのでお話しが少し外れる場合があり「今すぐ消え去れ！」と言う方も出てくると思います。作者の自分が本当に初心者な為にがっかりされちゃう事もありますが、ここは一つ宜しくお願いします。それでは「東方体験日記」をお楽しみ下さい。

第1話～いきなり幻想郷に～

突然ですが皆さんは夢の中で自分が違う世界にいる夢を見た事があるでしょうか。夢は人の思いにより映し出される物は大きく違うと思います。ですが「それは夢。」と言って、もしもそれが現実に起きたらどうでしょうか。このお話しはそんな夢が現実で起きてしまう1人の少年の体験日記のお話しです。

いよいよ年末に差し掛かろうとする。少年は来年の年明けの準備をしてる。

「年明けの準備をするとは父さんは言ったけどまだ早すぎるんじゃないかな。」

少年の名前は海竜勝（かいりゅうしょう）。ごく一般の普通の高校生だ。身長は高めでスポーツをしてる体型をしてる。

「勝！早く物置から年明けに使う物をだしてくれ。」

勝の父親の声だ。

「父さん去年何処にしまったのさ。いくら探しても無いよ。」

父親が来た。

「無い？そんな筈はない去年確かに此所に入れたぞ。」

父親は物置を探る。

「貴方、もうよしたらどうですか？」

勝の母親の声だ。

「父さん俺はもう寝るよ。」

「すまない勝。後は父さんがやるからお前はもう寝ると良い。」

「おやすみなさい。」

勝は部屋に戻った。

部屋の中には至る所に表彰状が貼られている。

「明日は柔道の朝練か。」

勝はごく一般とは言っても高校の間では柔道の名が広がっている。
試合も優勝する程の腕を持っている。

「目覚ましを四時半に合わせて。」

電気を消して勝は布団に入る。

勝は何か夢を見ている。

「貴方はもうこの世界の住人よ。」

巫女姿のリボンをつけた女性が勝に問いかける。

「なんだ夢か。」

毎度の如くいつもの女性が出てくる夢だと思いそのまま勝は歩いて行く。

「明日に成ったら近くの神社に来なさい。良い事があるわよ。」

夢は其処で終わる。

「ピピピ！」目覚ましが鳴る。

目覚ましを止める。

「あの巫女姿の女の人、神社に来てと言っていたな。」

勝は制服を着て柔道着を持って台所に行く。

「弁当持って、よし行くか。」

家を出る。

外は勿論の事まだ夜は明けてない。

周りは住宅地が並ぶ。

「近くの神社は此所だな。」

少し小さな神社だ。お年寄りが良く寄る位の場所で自分も余り来た

ことがない。

「良い事があると言ってたな。こんな所で何が起きるんだ。」

石造りの階段を上がり鳥居の前に着いた。

「ヒュー。」

風の音だけが神社の周りから聞こえる。

「何にも無いじゃないか。」

引き換えした。

「俺もどうかしてるよ、夢の中の言葉をそのまま実行したなんて。」

階段を下りる。

「あれ？」

周りを見る。

「何処だよ此所？」

見たことの無い場所だ。周りは住宅地が無く森が広がっている。

「くそっ、どうなっちまったんだ俺の頭は。」

階段をかけ上る。鳥居の前に戻った。

「さっきの神社じゃないぞ。」

「がさがさ。」

裏の方から足音が聞こえる。

「誰か知らないが聞くだけ聞くぞ。」

裏の方に走る。

「すいません！」

勝は足音の主を見る。

「！？。貴方は夢の中の。」

女性が勝を見る。

「本当に来たのね。幻想郷に。」

何か解らない単語に勝は聞こえた。

「げんそうきょう？？」

「長い事、夢の中にお邪魔して貰ってありがとうね。」

女性は優しい笑顔を見せる。

「とにかく今は戻らせてくれないか。此れから大切な朝練があるんだ。」

「夢の中で言わなかった。貴方は幻想郷の住人よって。」

「・・・。冗談きついぜ。」

「教えて欲しいことが沢山あるまずこの世界は何なのか、そして貴方の名前も。」

「まず、貴方の名前を教えて。」

「俺は海竜勝。」

「私は博麗霊夢（はくれいれいむ）」「そしてこの世界は貴方の世界とは違う世界、幻想郷と言う世界よ。」

第1話～いきなり幻想郷に～（後書き）

海竜勝は博麗霊夢の夢の誘いのままにいきなり現実で幻想郷入りとなる。なぜ霊夢は勝を幻想郷に誘ったのかその真相は次回にご期待を。

第2話～巫女の訳とは～（前書き）

海竜勝は博麗霊夢の夢の誘いのままに現実で本当の幻想郷入りとなる。霊夢が勝を誘った訳とは此れから始まる第2話でその答えが解ります。

第2話～巫女の訳とは～

勝は霊夢の言葉を聞き少し自分なりに整理した。

「違う世界、幻想郷、夢の女性、俺はまだ夢でも見てるのか？」

「夢を見ていると思っているのね。確かにいきなり違う世界なんて言われたら驚くわね。」

「いや、むしろ驚くのを通り越して驚けないよ。」

「それもそうね。」

霊夢は表の方に歩く。

「ちょっと待って。」

「良いからついておいで。」

鳥居の前に着いた。

「この世界は妖怪がいたり妖精がいたり貴方の世界にはいない不思議な人達が沢山いるのよ。」

霊夢は周りを指差す。

「なぁ、何で俺をこの世界に誘ったんだ。」

「そうね、何でかな。」

霊夢は階段を下りる。

「教えてくれ！」

霊夢は歩くのを止めて座った。

「体験して貰いたいのよ。貴方にとって何も知らないこの幻想郷をね。」

「それが俺を誘った訳か？」

「そう。だから貴方は楽しんでおいで。」

「トン」

勝は背後から何者かに押された。

「えっ！？」

急に空間が割れた所に勝は落ちる。

勝は最後に自分を押した者の姿を見る。

帽子を被った金色の髪をした女性だ。

「貴方のこの先の人生は私達が見続けるよ。」

その女性は勝に一言だけ言った。

勝は空間に落ちた。

「紫、彼は大きく変わって又此所に戻ってくる筈よ。」

「そうである事を願うよ。」

その女性、八雲紫（やくもゆかり）は言った。

勝は空間を出た。

「どん！」

とっさに受け身を取り怪我は免れた。

勝は立ち上がる。

「何が楽しんでこいだよ…。」

周りを見る。骨董品みたいのが至る所に置いてある。

「おまけに又何処か解らない場所だしよ。」

1人の男性が勝の前に立っている。

「いらっしゃい。」

勝は男性を見る。銀髪で眼鏡をかけた落ち着いた印象の男性だ。

「いや、すいません。いきなり出てきてしまって。」

「やられたんですね。」

「やられたと言うのはどういう事ですか？」

「八雲紫さんですよ。」

「やくもゆかり？？」

初めて聞く名前だ。漢字が思い浮かばない。

「名前が解らない処を見ると貴方は幻想郷の人ではないですね。」

「はい、違います。その前に幻想郷と言うのが何かも解りません。」

「来て下さい。」

男性は奥の方に行く。勝も行く。

「申し遅れました、私はこの香霖堂の店主で森近霖之助（もりちかりんのすけ）です。」

「海竜勝です。」

霖之助は椅子に座る。別の椅子に勝も座った。

「本当に驚かれたのではないですか。」

「博麗霊夢と言う人にも言われました。ですがもう驚きを通り越しました。」

「そうですか。」

霖之助は紙を取り勝に渡した。

「この紙は。」

「それは私が過去に出会って来た人達の名前です。この世界の全員までとはいきませんが良かったら参考にして下さい。」

勝は紙を見る。

一番先頭に自分が最初に会った人物「博麗霊夢」の名前が出てる。そして更に見ると「八雲紫」の名前も出てきた。

「霖之助さん。この紙頂いても良いですか。」

「どうぞ。」

勝は紙をしまった。

「おじゃまするぜ。」

向こうの方で女性の声がする。

「お客さんが来ましたね。ちょっと待っててて下さい。」

霖之助は歩いて行った。

「何だ他にお客がいたのか。」

女性が勝の後ろにいる。勝は女性を見る。

黒い帽子を被っていて金色の髪に黒い服装、何かに出てくる魔法使いの様な人物だ。

「海竜さん。彼女は霧雨魔理沙(きりさめまりさ)と言って此所の常連さんです。」

「きりさめまりさ？ですか。」

魔理沙は勝の顔を見る。

「霖之助、何か理解不能の顔になっちまったぜ。」

「魔理沙さん実は・・・。」

霖之助説明中。

「成る程な霊夢か。」

魔理沙は勝を見る。

「勝、この際だから幻想郷に暮らせば良いじゃないか。」

「私も同じ事を言います。」

魔理沙と霖之助は勝に言う。

勝は深く考える。もしも俺の世界でもこうした時間が流れているなら今頃は行方不明で捜索願いが出てるに違いない。それに俺は俺の世界で大きな期待を持たれてる。柔道だって大学の推薦もあるのに急に違う世界で暮らせば良いと言われても。

悩む勝に霖之助が。

「暫く此所で働きませんか？」

「此所で。」

「それは霖之助ナイスアイデアだぜ。勝、お前も幻想郷に来て泊まる所が無いだろう。暫く霖之助の所で世話になると良いぜ。」

勝は霖之助を見る。

「お役に立てる様に頑張ります本当にありがとう霖之助さん。」

「いえいえ、私も前から人が欲しかった処なんですよ。」

第2話～巫女の訳とは～（後書き）

第2話で突然のワープ。新たに来た場所は香霖堂そこの店主の森近霖之助に「暫く此所で働きませんか？」と言われた勝は霖之助の所で働く事を決める。博麗霊夢と八雲紫この二人の事はまだ何も知らない勝。この二人は一体何を望んでいるのか。次回のお話しで会いましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4108z/

東方体験日記

2011年12月15日03時48分発行